

# 過労死秒読みのスーパー社員

## ネズミの過労死実験

これは、「疲労研究班」20人以上の大学や機関の研究者で構成された文部科学省主導の研究会）が行った実験で、ネズミを10日間、毎日水槽で30分間泳がせることで、働き続けるメカニズムを検討したものです。果たして、強制的に水槽遊泳を強いられたネズミはどうなったのでしょうか？

①日目。水槽で30分泳ぎ続けると、その後、ネズミは疲れ果てた様子で、ぐったり寝てしまい1時間ほど起きて来なかった。  
②日目。この日も初日同様、「仕事」のあとは、1時間程度、寝入ってしまった。  
③日目。ネズミの行動に変化が起きる。仕事後は初日、2日目と同じように寝てしまうのだが、40分程度で起き上った。  
⑦日目。徐々に減り続けた睡眠時間が、わずか5分になった。そして、⑩日目。30分泳ぎ続けるという過酷な「労働」を終えたネズミは、寝ることもなく平然と動き始めた・・・。

こうして誕生したのが、「働き者のスーパーネズミ」です。しかし、これは、ネズミが過重労働で鍛えられて、「体力」がついたからではありません。脳の中にある「疲れの見張り番」自体が疲労により機能しなくなった結果、起きてしまった現象です。

## もう一度、その「働き方」大丈夫？

皆さんの職場ではどうでしょうか？JR九州では、毎年ダイヤ改正の度に様々な合理化が行われています。駅の無人化や委託化、要員削減、ワンマン化など一人当たりの労働量は右肩上がりに増えています。この状況を「むかたない」「こんなものだ」「サラリーマンだから」と言っていて甘んじて受け入れる姿勢は、まさに「スーパーネズミ」を生み出す仕組みそのものです。

では我々労働者が取るべき姿勢はどんなものでしょうか？人間とネズミの決定的な違いは「人間は考えることができる」ということです。働いていて、疑問や違和感、不満を感じたときにそれを声に出し、周囲の人間や会社に伝え、気付きを与えることができます。与えられたルールの下で働くのが従業員という考え方もありますが、ルール改悪を指摘できることが私たち「人間」とネズミの決定的な違いであり、①日目の水槽に戻る方法だと言えます。

国労は少数派ですが、疑問や不満を声に出すことが重要だと考えています。声に出せば「問題無し」ではなくなります。



“karoshi”という言葉は、英語辞書にも載っています。



# 若い力

第131号

2020年 2月1日

発責 国労九州本部



博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

JR 092-2075

NTT092-483-1515